

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

## <研究ノート> 高階為基をめぐって

著者	中村 文
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	18
ページ	332(15)-325(22)
発行年	2018-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00001185/">http://id.nii.ac.jp/1354/00001185/</a>



# 高階為基をめぐつて

中村 文

## 一 『賴政集』所載の贈答歌と「殿上藏人歌合」

平安時代末期の歌壇で活動した源賴政の家集の末尾近くには、左の贈答歌が収載されている。宮内庁書陵部に蔵される桂宮本（函架番号五一―一五）に拠り、私に仮名遣いを改め濁点を付して示そう。

甲斐大進為基もとに故帥大納言集を尋につかはしたりし  
折しも大事なる所労有て人してかゝせてつかはしける  
はかなさを誰かは君にかたらしむかしの跡を尋ざりせば

（賴政集 679）

かへし

ありなしをかつはかたみに聞やとてむかしの跡も尋ぬ計ぞ

（賴政集 680）

679 番歌詞書の「為基」の箇所は、同系統のⅠ類本では「為基」、別系統のⅡ類本では「為基か」となっており、桂宮本ないしはその祖本の誤写と考えられる。

この「為基」は、後述するように、高階為基であることが確実

である。679 番歌は、帥大納言すなわち源經信の家集を為基が所持することを知ってその借覧を求めてきた賴政に対して、折しも重い病に臥していた為基が詠み送った歌で、680 番歌は賴政の返歌である。

源經信（一〇一六―一〇九七）は後期摂関時代から院政期初頭にかけて活動した貴族で、後拾遺集が成立する十一世紀後半には、和歌界に重きをなした。また、管絃に堪能な敦実親王（宇多天皇皇子）を祖とする家柄（宇多源氏）に生まれ、琵琶にも堪能であり、漢詩文にも手腕を発揮した。

雅事の面で広く認められ、とりわけ歌壇において権威者として高く評価された經信の家集を所持していたとなれば、為基自身も和歌に深い関心を持ち作歌に励んだものと想像したくなるが、高階為基の詠作は現在残る撰集類には見出すことができず、当代において歌人として認められてはいなかったと推測される。

ただし、宮内庁書陵部に伝存する『殿上藏人歌合』（孤本）に五首の歌を残す「為基」が、当該の高階為基と推定される。この歌合は、「禁中月」「野径月」「海上月」「寄月祝」「寄月恋」の五題

を、範兼・盛定・惟兼・為基・時信・為盛の六人の作者がそれぞれ詠み、十五番に番えられている。判者や判詞は記されていない。当歌合については、早く、久曾神昇・橋本不美男・萩谷朴により詳細な検討が加えられている。作者の五人すべてが蔵人であった大治五年（一一三〇）六月二十二日以降、同年十一月二十四日までの間の張行で、歌題のすべてに「月」が入ることから、八月十五夜ないしは九月十三夜に催されたとする推定は、概ね首肯されよう。大治五年は崇徳天皇の治世下である。松野陽一が当該歌合について、

崇徳天皇内裏歌壇の、現存資料による最初の催しということになる。天皇（この時十二歳）がどの程度関係していたかは不明であるが、寄月祝の歌などは明らかに天皇祝賀の内容であり、臨席していたと考えてよいであろう。<sup>42</sup>

と述べるごとく、同天皇の主催にかかる最初期の和歌行事である可能性も考えられ、小規模ながら軽からざる意義を持つ歌合と言える。

為基の和歌実績は以上の二点が残るにすぎない。撰集類にも入集せず、交流を確認しうる他歌人も頼政以外には見出せない為基について、歌壇的な位置や和歌史上の意義は測りようがないが、崇徳天皇時代の殿上歌合への参加も、経信の家集を所持していたことも、それぞれに重要な事実ではあろう。高階為基がどのような人物であったか、実績を明らかにしておくことにも一定の意味があろうかと思われる。以下では、為基の官人としての履歴を辿り、政治社会的な位置を確認することとしたい。

## 二 官人としての活動

為基の名は、『尊卑分脈』や『続群書類従』（第七輯上）に収められる高階氏系図には見出せず、また、『地下家伝』や『系図纂要』にも記載がなく、その系譜は未詳である。

記録類に残る為基の公的事績としてはもっとも時期が早いものは、六位蔵人としての活動である。『中右記』目録の大治三年（一二二八）正月九日条に、「補蔵人（為基）」と、六位蔵人に補されたことが記される。ところが、これに先立つ大治二年九月に、蔵人としての実績が見出される。鳥羽院后待賢門院璋子が四宮雅仁親王（後の後白河天皇）を出産した際の記録（九民記）が『御産部類記』に収められるが、その三夜産養の記事（大治二年九月十三日条）に、「次有集攤事、先蔵□為基取紙一帖」と見える。<sup>44</sup> 為基が蔵人として産養に奉仕したと読むのが自然だが、『長秋記』元永二年（一一一九）五月三十日条の顕仁親王（崇徳天皇）三夜産養における攤の記事では、「六位進範隆、大進顕頼、権亮実能進紙」と中宮（璋子）の宮職三名が攤に用いる「紙」に奉仕しており、『御産部類記』の記事でも「蔵人」と「為基」の間に何らかの脱落がある可能性も考えられよう。不審は残るが、『中右記』に従って、大治三年正月九日に六位蔵人に補されたと考えておく。為基は生没年も未詳だが、二十歳代後半から三十歳前後であろうか。長治元年（一一〇四）生まれの頼政とは、ほぼ同世代だったのではなからうか。

官人としての以後の活動を追ってみよう。大治四年正月九日、関白忠通の女聖子が入内したが、同十日に聖子方に忠通や公卿が

集った折に、「藏人為基」が一献の瓶子を奉仕した。同二十日には崇徳天皇が三院に朝覲行幸を行ったが、「留守」の人数に「藏人為基」が見える。同二十三日には除目中夜において瓶子を奉仕した（以上中右記）。同三月二十五日の春季御読経では右方堂童子を勤めた（長秋記）。この年七月七日、白河院が崩じた。『中右記』同十五日条にはその葬送が記されるが、別当・判官代らの院司に続けて「非藏人」の名が挙げられる中に「亮<sup>高殿</sup>為基」と見えており、白河院非藏人であったと知られる。同年八月二十八日、左兵衛少尉に任ぜられた（中右記・長秋記）。この時、正六位上であった（中右記）。

翌大治五年二月九日、崇徳天皇女御聖子が立后したが、この折、輦車宣旨を伝えたのは「藏人右兵衛尉為基」であった。同二月二十六日、中宮大夫となった（二十一日任）宗忠は慶賀を行ったが、内裏において「藏人為基」を通して事由を奏し、またその吉書にも為基が候した。翌二十七日、土御門内裏で行う仁王経転読の日時勘文等について、権大納言宗忠は「藏人為基」を通して奏聞している。同三月四日、崇徳天皇が土御門内裏に遷御したが、中殿のしつらは、「藏人兵衛尉為基」が所衆を率いて奉仕したという（以上中右記）。いずれも、為基が崇徳天皇に近侍し、よく勤仕していたことを証す事績と言えよう。同四月一日の平座においては、天皇の御出のない旨を伝えたが、その折の振る舞いについて、権中納言源師時から「往復不踏参議座超行、片聞故実似猿楽、謂不踏座者是納言座事歟」と非難されている（長秋記）。しかしながら、奉仕が認められたのか、同年六月二十二日には右衛門尉となり（中右記・長秋記）、さらに十月五日には検非違使宣

旨を受けた（中右記）。同十一月八日、鳥羽院の仰せにより参内した宗忠は「藏人左衛門尉為基」に付して事由を奏したが、この時、為基は藏人一臈であった（中右記）。

翌大治六年（天承元年、一一三一）正月三日、中宮聖子方の臨時客が催され、為基は二献の瓶子を奉仕した（中右記）。これが藏人としての最後の事績で、石川久編『藏人補任』（続群書類従完成会、一九八九年）はこの記事により、翌々五日に叙爵し藏人を去ったかと推定している。その後、甲斐権守に任ぜられたらしく、『知信記』の長承元年（一一三二）二月十一日条、および同二十八日条には「甲斐権守」として見えている。

### 三 摂関家への奉仕

藏人を下りるのと相前後して、大治末年頃からは摂関家に関連する事績が増え始める。大治五年（一一三〇）二月二十一日の聖子立后に際しては、東三条殿において「藏人兵衛尉高階為基」が調度を設営した。また、四月十九日に行われた大殿忠実の男頼長の元服定では瓶子を奉仕（以上中右記）、長承二年（一一三三）六月に頼長が実能女幸子と婚した際には前駟を勤めた（長秋記・十九日条）。頼長は長承四年二月に左大将となったが、その大饗では「散位為基」が大将机の設営に従っていて（中右記・知信記、八日条）、官人としての事績というよりは、むしろ、摂関家に親しく仕えていた様子をうかがわせる。保延二年（一一三六）十二月に頼長は内大臣となったが、その大饗や慶賀においても前駟を勤めた（台記）。

保延年間以降は聖子に対する奉仕が顕著になる。保延二年十一

月三日、五節童女参入に際し、童装束が中宮聖子から頼長に下されたが、その使いを勤めたのが為基である。同月二十四日の大原野祭には「中宮大進為基」が参候し、一献の勸盃を勤めている（以上台記）。

聖子への奉仕はこの後も長く続き、聖子が転上するに伴って、為基の肩書きも皇后宮大進から皇太后宮大進へと変化した。聖子による恩顧も顕著で、康治二年（一一四三）正月三日、近衛天皇が鳥羽院の小六条院に朝覲行幸したのに際し行われた勸賞で、「皇后宮大進」<sup>（皇后宮大進）</sup> 為基は従四位下に叙された（本朝世紀）。また、久安二年（一一四六）正月には、「皇太后宮当年御給」により、従四位上に至った（本朝世紀・五日条、台記・七日条）。久安四年二月七日の春日祭では皇太后宮使を勤めた（本朝世紀）。聖子は久安六年二月二十七日に女院号を受け皇嘉門院となったが、『兵範記』久寿二年（一一五五）六月二十九日条には皇嘉門院の六月祓えに別当として陪膳を勤めた記事が見えており、女院院司として側近くに仕え、重きをなしていたと知られる。同年九月十四日、聖子の母宗子（忠通室）が没した。同月二十九日に女院殿上において院司による法事定があり、為基は金泥法華經一部ほかの經の行事を宛てられた。また、翌十月十六日に法性寺で行われた仏事において「能米五十石、布百端」を奉仕している（以上兵範記）。

聖子に対する忠勤とも関わるのだろうが、康治二年（一一四三）以降は忠通に接近していく。康治二年八月二十二日、第三度の表を提出した摂政忠通の近衛第において、為基は使に賜る禄運び頼長に渡しており（台記）、すでにこの時点で忠通家に奉仕していたかと推測される。久安三年（一一四七）三月二十七日、高陽

院泰子と摂政忠通は父忠実の七十賀を催行したが、為基はこれに参じて、院の諷誦使源師行の来訪を伝え、また賜禄に候した（台記）。翌久安四年二月十一日、忠通は法性寺辺の新造第に移徙したが、為基は賓客との盃事に候し、同六月二十三日には侍従兼長の慶賀を忠通とその室家に伝えている（以上台記）。忠通家の家司として記録に現われるのは、『兵範記』久安五年十月二十五日条の忠通大饗の折の吉書の記事に、「家司皇太后宮大進為基」と見えるのが最初だが、これ以前より忠通家に仕えていたことは明らかであろう。同年十月二十六日には忠通室宗子の侍所始があり、為基は宗子の家司にも加えられた（兵範記）。仁平二年（一一五二）三月十六日に忠通の嫡男基実が三位少将の慶賀を行ったが、忠通の勘解由小路殿では「別当為基朝臣」が北政所宗子に伝え、翌四月十六日の基実の御隨身所始に当たっては、忠通の直廬に召されてこれを行うように命じられている。仁平三年五月六日には忠通の除服（頼長女が四月二十七日に没）に陪膳を勤めている（以上兵範記）。

久寿二年（一一五五）八月、踐祚したばかりの後白河天皇が先帝近衛天皇の喪に服するために着るべき錫紵が調達されていないという事態を受け、為基は忠通に命じられて、本来蔵司（後宮十二司の一つ）が納めるべき御服を調達することとなった（兵範記・十一日条、十三日条）。先にふれた宗子の仏事において、為基が多数の豪華な経ほかの物品を準備していることと併せて、摂関家の家政機関を支える諸大夫層としての為基の財力の大きさを物語っている。また、忠通の為基に対する信頼の深さをうかがわせる。久寿二年八月十四日に為基の男俊成が忠通の勾当となつ



た。『兵範記』同日条は、殿下の勾当は三人おり、四人が任ぜられるのは未曾有の例だとして、あるいは新帝の藏人に補されるための処置であつたかと推測している（十四日条）。俊成は同月二十三日に後白河天皇の藏人に補されており、俊成を勾当としたのは、為基への信頼に裏付けられた忠通の恩顧だったと考えられる。

忠通家への奉仕はこの後も続き、保元元年（一一五六）正月の忠通の御手水や（兵範記・一日条、三日条）、同年六月二十九日の六月祓に陪膳を勤めた。さらに、同年八月二十九日には、元服した忠通男基房の政所別当となり（以上、兵範記）、忠通家との繋がりはさらに密接になったと推測されるが、現在見出せる為基の事績としてこれが最終のものである。六位藏人に補されて以降、為基の社会的な活動は約三十年間にわたっており、時を同じくして男俊成が藏人として歩み出していることを考え合わせると、為基はこの後間もなく引退ないし没した可能性があるだろう。

#### 四 頼政との交流

以上のごとく、為基は前半生は六位藏人等の官人として、後半生は摂関家、特に忠通・聖子父娘の家司として活動した。

それでは、頼政は為基とどこで面識を得たのだろうか。頼政が為基を呼ぶ「甲斐大進」の呼称が、甲斐権守で皇后聖子の大進を兼ねていたゆえの命名であることは明らかである。「甲斐」は「甲斐権守」に任じられたことがある」意で、職を離れた後も長く用いられた可能性があるが、「大進」の方は聖子が女院号を受けたのに伴い為基が別当となって以降は呼ばれなかったのではないだろう

か。そうだとすれば、頼政と為基は、聖子が皇嘉門院となった久安六年二月までには親交を結んでいたと推測される。

頼政は姉妹が忠通家に女房として仕えていたものの、頼政自身には摂関家との深い結びつきを示す事績はなく、為基と頼政の生涯とが交差する地点は、為基が摂関家への忠勤を示し始める以前と考えるのが妥当であろう。両者の経歴に共通しているのは、例えば、崇徳天皇の六位藏人を勤めたことである。その時期は、為基が大治三年（一一二八）～同六年初頭であるのに対し、頼政は保延二年（一一三六）四月～八月であつて（公卿補任）、二人が同僚として活動したわけではなく、また、頼政の任期は非常に短い。しかしながら、為基は藏人を下りた後も崇徳天皇中宮聖子の周辺で活動を続けている。崇徳天皇と中宮聖子は近衛天皇踐祚後も同殿していたとされるので、藏人となった頼政が為基と面識を得る機会も少なくはなかったであろう。

頼政と為基が接触した可能性のある場としては、白河院の周辺も想定できる。為基は白河院が没した折に「非藏人」であり、頼政もいつ頃の任であつたかは不明ながら、白河院判官代を勤めたことが『公卿補任』に記載されている。白河院―崇徳院と連なる皇統と結びつく場所、同世代の頼政と為基は面識を得たと考えられる。本稿冒頭に掲げた贈答は、現在残る為基の最終事績である保元元年八月からそれほど時日を隔てない時期に交わされたと推測される。二人が職務を通して親しく交流した時期からは三十年近くの年月が経過している。両者が贈答の中で交わし合う「むかしの跡」とは、直接的には経信の家集を指すのではあろうが、長い交流の空白を越えて呼び起こされた壮年期の記憶を懐かしみ

合っているのだろう。

ところで、『頼政集』679番為基歌に見える「はかなさ」は比較的新しい表現で、『新編国歌大観』の検索によれば、その初例は和泉式部の、

世のいとさわがしきころ

はかなさにつけてぞなげく夢のよをみはてずなりし人によそへて (和泉式部集<sup>638</sup>)

だが、勅撰集では『後拾遺集』に見えるものの、八代集には計七例しか見出せない。『統詞花集』に五例見えており、社会状況が大きく変動した平安末期の人々が、心情を託しやすい語として盛んに用いられた面もあるが、

子なくなりて侍りけるころ、おなじおもひなりける人に

つかはしける

橘則光朝臣

かたらばやこのよの夢のはかなさを君ばかりこそおもひあはせめ (統詞花集・哀傷<sup>417</sup>)

の歌などでは、「はかなさ」の語は明確に「死」を示している。為基歌においても、詠作者に身近に迫った「死」を意味する語として解釈すべきであろう。

すなわち、この一首の意は、「あなた(頼政)が古人の書蹟(経信集)を求めて、遠い昔に親しんだ私を訪ねてくれなかったならば、やがてはかなく死んでしまう私のことなど、いったい誰があなたに語るでしょうか」と理解しうる。

反実仮想の話法で語られる「はかなさ」には、確定的な事実として自分の死後が予想されている。『経信集』の借覧が目的であったにせよ、自分が生きている間に訪ってくれなかったならば、も

う私についてあなたに語る人はいないのだと述べる為基歌は、頼政との間に共有されている過去の記憶、すなわち「むかしの跡」が、自らの死によって消滅する哀しみを訴えかけている。頼政もまた、その消息を深く理解したがゆえに、当該贈答歌を家集に収載したのであろう。

為基と頼政が経信集の借覧にかこつけてひっそりと愛惜し合う「むかしの跡」とは、先に見た通り、崇徳天皇の側近くでも活動した遠い日々の記憶であろう。ここで思い起こされるのは、頼政が後に六条天皇時代(仁安二年、一一六六年)に昇殿を果たした際に清輔と交わした贈答歌を家集に収めるにあたって、崇徳天皇時代に六位藏人を経験した記憶と併せて、「二代のみかどに昇殿して侍し時」(頼政集581詞書)と表現していることである。昇殿を祝う清輔の贈歌が、「立ち帰り雲居」と始まる意図を説明する必要がある詞書とも解せるが、「還昇」や「還り殿上」の語を用いず、わざわざ三十年前の補藏人の実績を持ち出しているのは、崇徳天皇への近侍が頼政にとって重要な意味を持つ出来事であったからに違いない。

『頼政集』には崇徳院主催の歌会に出詠した折の作が収載されるが(157、「更恋郭公」題)、これに関連してさらに注意されるのは、鳥羽院の没後の詠、

鳥羽院かくれさせ給て後、歌林苑にて人々懐旧といふ心をよみ侍けるによめる

むかし我ながめし月の入しより世にふる道はふみたがへてや (頼政集<sup>620</sup>)

に、鳥羽院生前の世にあつては正しいあり方を違えることなく生

二〇一五年。

きることができていたとする意識が認められることである。鳥羽院も崇徳院も白河院によって皇位継承者たることを指名された。謂わば、正統な皇統を受け継ぐ王であった。鳥羽院の死後、皇統の乱れにより保元の乱が起き、以後も対立する皇統の間で争いが続く時代を生きた頼政にとって、崇徳院こそは正統な皇統を体现する最後の天皇だったのではないだろうか。崇徳天皇とその后聖子に仕えた為基との間に交わした「むかしの跡」を愛惜する心情と、それを家集に収めた為基には、皇統に対する頼政の意識が反映しているように思われる。

## 注

- \*1 『桂宮本叢書』第十四卷、萩谷朴『平安朝歌合大成 増補新訂』歌合番号三三三（同朋舎出版、一九九六年）。
- \*2 松野陽一『藤原俊成の研究』第2篇第1章 563頁（笠間書院、一九七三年）。
- \*3 宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 御産部類記 下』（明治書院、一九八二年）に拠る。
- \*4 「攤<sup>だ</sup>」は骰子を使って賭を行う遊戯という。産養に行われたらしく、『紫式部日記』の寛弘五年九月十五日の条（後一条天皇五夜産養の記事）に「殿をはじめたてまつりて、攤うちたまふ。紙のあらそひとまさなし」と見える。「紙」とは賭け物とする「碁手の紙」のことで、『九民記』の記事に為基が奉仕したとする「紙一帖」もこれを指しているよう。
- \*5 頼政の生涯については、井上宗雄『平安後期歌人伝の研究 増補版』（笠間書院、一九八八年）、頼政集輪読会『頼政集新注 下』『解説』（中村文執筆、青簡舎、二〇一六年）。
- \*6 佐伯智広『中世前期の政治構造と王家』第二部第一章（東京大学出版会、



## An Essay on Takashina-no-Tamemoto

NAKAMURA, Aya

(111)

---

キーワード：高階為基、頼政集、経信集、殿上藏人歌合

Key words : Takashina-no-Tamemoto, Yorimasa-shu, Tsunenobu-shu, Tenjo-kuroudo-utaawase